東日本大震災　MSW 災害支援ニュース

JASWHS　公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

令和５年７月27日　第13巻（第１号）

発行：東京都新宿区住吉町８-２０ 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム　TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

巻頭言

第７１回 公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会 全国大会（東京大会）に参加して

１．ワークショップ１を開催して

２．ワークショップ１でのグループワークに参加して

３．ワークショップ１参加者アンケート集計結果のまとめ

４．石巻だより１（遺構「門脇小学校」を訪ねて）

５．石巻だより２（「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を訪ねて）

６．災害支援チームからのお知らせ

７．災害支援ニュース発行のお知らせ

編集後記

◇　巻頭言

第７１回 公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会 全国大会（東京大会）に参加して

石巻災害支援チーム　統括　笹岡　眞弓

2023 年 6 月 17 日、20 年ぶりに東京で協会の全国大会が開催されました。

当協会の東日本大震災での石巻市支援事業も、今年度をもって終焉を迎えます。

事業報告としては最後の企画に、参加していただいた方々に心から感謝を申し上げます。**13 年前の大震災の記憶を風化させてはいけない**、この思いは皆様共通に持っていることと思います。しかし、阪神・淡路大震災の記憶が、ある研究によるとわずか 1 年で多くの人々の記憶から消されていったと。そのことを思うと、災害の多いわが国のソーシャルワーカーとして、このワークショップの意義は大きく深いものであったと、我田引水ですが思います。

今も石巻で活動している「3.11 メモリアルネットワーク」の方々。ドローンを使って分かりやすく端的に、あの時の状況を伝えてくださいました。「命のかたりべ」である千葉さんには 13 年を経過したからこそ、言えること、表現できることを話していただけました。最後に「あの時このような活動をしている、し続けてくれる人の存在を知っていれば、…」とコメントしてくださり、やはりこの事業の継続と伝え続けることの意味を再確認できました。7 年にわたり石巻に住み、この地でソーシャルワーク支援を行ってきたリーダーの福井さんの活動報告は、皆さんが共感できありがたいものでした。

伴走的支援のバトンは、まだ次の走者に渡さなくてはならないのが、今の石巻です。

このワークショップを一つの区切りとはしますが、どうかこの経験を風化させず、次に備えるソーシャルワーカー達を今後も応援していきたいと、願っています。

1.　ワークショップ１を開催して

∞ ∞

石巻災害支援チーム 現地責任者　福井　康江

∞ ∞

この度のワークショップは、当協会が 2011 年 4 月から石巻で続けている 12 年間の災害支援活動を振り返りながら、被災地での活動がその後の実践にどのよう生かされたのかなど忌憚なく話合えることを目的に企画しました。ワークショップは、まず「3.11 メモリアルネットワーク」のご協力をいただき、現在の石巻の現状を知っていただくためにリモートでつなぎながら南浜地区の被災の時と現在の様子について話をしていただき、震災遺構門脇小学校周辺の様子をライブカメラから配信しました。その後、おなじく「3.11 メモリアルネットワーク」から紹介していただいた、任意団体「命のかたりべ」のお一人である、千葉颯丸さんから震災時から今までの経験や思いを話していただきました。

私はこの 2～3 年前より、20 代の方から、「震災の経験をやっと話せるようになった」との声を聞くことが多くなり、小中学校の時に被災を経験した方の話をなかなか聴いてこれなかったことや、関心を充分に向けることができなかったとの反省を強めていました。思えば、2011 年 4 月に石巻市内の避難所を廻った時、元気に大人たちの手伝いをする子どもたちの姿や笑顔にこちらが励まされるといったこともあり、そこに安心してしまっていたこともあったように思います。震災後間もなく、気仙沼市の「水を運ぶ少年」の写真が全国紙に載り、人々の心を打ちました。こうした子どもたちの姿に、大人達は安心しどこか頼ってしまっていたのではないでしょうか。
今、震災の経験を話す彼らたちの言葉に真摯に耳を傾けてゆくと、抱えてきた大きな苦しみがあることや、大人たちが知らず知らずに彼らに我慢を強いてしまっていたのではないかと感じ愕然としました。今からでも、ここに手を尽くすことをしなければならないと強く思っていました。

そうした中、千葉颯丸さんにこの度のワークショップで話していただくことを快諾いただき、全国の皆さんと一緒に話を聴く機会が持てたことは、本当にありがたいことでした。大切な家族を失い、こころの痛みを抱えながらも、いわゆる“被災地”で暮らしていなかったことなどから、やっと今になり自身も被災者であったと実感できたことなどを話していただきました。こうした“被災者”の存在を改めて知り、自分の周りにも同じような経験を持つ方がいるのではないか、自分自身も同じような経験をすることもあるのではないか、と感じ、企画者側ではありますが、本当に貴重な話を聴くことができたと思っています。

石巻での災害支援活動中に開催される全国大会としては、今回の東京大会が最後となり、会場とライブ配信を併せて 100 名以上の方に参加いただきました。中には社会福祉を学ぶ学生の参加者もおり、災害支援への関心がつながっていることを心強く感じることもできました。

これからの石巻での活動は、時間との勝負の時期に入りましたが、一つで多く、少しでも深く、この地に足跡を残して行ければと思います。

〔当日話題提供時に使用したスライド（抜粋）にて掲載〕

２０１１年３月１１日(金)
１４時４６分
東日本大震災　国内最大級Ｍ９．０
震度６強　想定外の大津波襲来

３月15日　当協会では、災害対策本部が立ち上がる

３月27日　笹岡本部長、亀田総合病院の小野沢滋医師は宮城県庁へ向かい、県保健福祉部長と面会し、石巻市の被災状況の説明を受けた。その後石巻市へ向かった。

3月29日　市街地から20キロ離れた、避難所となっていた総合文化施設「遊楽館」を訪問した。遊楽館で責任者をしていた、市立病院の赤井医師SWの派遣の要請を受ける。

2011年　4月　2日
遊楽館（のちに福祉避難所となる）から、支援活動が始まった。

その日から2011年９月末まで、述べ約700人の全国の会員が遊楽館の現地支援に参加した。

東京本部の事務所では、述べ608人が支援に入り、現地での活動を支えた。

訪問支援・アウトリーチ活動

病院での業務と違い、会ったこともない人の家に訪問し、話を聴くことは、かなり緊張することだった。信頼関係を築くことが難しいと感じた。

被災後の住宅の状況、対象者の表情、家族とのやりとりの様子など、その人の生活の場でしか見えないものがたくさんあった。

生活再建への支援

市役所から生活再建、恒久的な住宅への転居を求められる中、再建先が決められない人への支援を、仮設住宅を１軒,１軒訪問しながら始めた。

時には、「仮設から出たくない。」との声も聞いた。

限られた時間、限られた選択肢の中で、再建先を決めなければならない被災者の状況を理解し、時には退去期日や復興住宅の入居要件について、市とかけあうこともあった。

2.　ワークショップ１でのグループワークに参加して

皆で語ろう、東日本大震災　医療ソーシャルワーカーによる支援のバトンの軌跡
～グループディスカッションを通して～

文京学院大学・日本医療ソーシャルワーカー協会　平野　裕司

話題提供者３名の方々の話を聞いた後、「自分が所属する病院がある地域で、大規模災害が発生した場合、ソーシャルワーカーとして何をするのか。」「自分が所属する病院が被災した際、外部支援のソーシャルワーカーに何をしてほしいか。」をテーマにグループディスカッションを行いました。

参加者の中には実際に東日本大震災の後に石巻に行き支援活動を行った人や発災当時小学だった人がおり、それぞれ違った立場でのディスカッションが行われました。

私が会場を回っている時のある方がお話していたこととグループでのやり取りの一部を紹介します（ご本人様には記事になるかもしれない旨お伝えし、了承をいただいております。）

この方は、発災当時小学生でした。関東在住で東北地方が震災の影響により酷い状況にあることをテレビを通じて知ったそうです。その後、中学校・高校を経て大学へ入学。晴れて今年の４月にＭＳＷとして勤務を始めました。今回のワークショップへの参加のきっかけは職場でＤＭＡＴについて聞いたことがきっかけとのことだったそうです。「3.11 メモリアルネットワーク」の藤間さん、「命のかたりべ」の千葉さん、日本医療ソーシャルワーカー協会の福井さんの話を聞き、災害時の状況とその後の思い、ソーシャルワーカーが被災者支援においてどのような活動を行ってきたのかを知る機会となったと話していました。

一方、自分が所属する病院がある地域で大規模災害が発生した際、自分が被災者でもあり、支援者でもあり続ける必要性があることに不安を感じていることを話してくれました。話す様子からは不安がにじみ出ていました。

しかし、同じグループにいた先輩ＭＳＷからの言葉でその場の雰囲気が変わりました。

「私だって不安。家族が心配。みんな同じ。」

その後、このグループでは不安を語りあい、自分ができることはなにかと考えていました。

私はこの様子をみて、改めてグループで考えることの必要性・重要性を感じた瞬間でした。

この原稿を書いている今、テレビでは豪雨による河川の決壊のニュースが報道されています。被害がないことを祈るともに災害から命を守るためのソーシャルワークについて改めて感じています。

３.　ワークショップ１参加者 アンケート集計結果のまとめ

∞ ∞

2023 年 6 月 17 日　全国大会・東京大会　ワークショップ 1
「皆で語ろう、東日本大震災
医療ソーシャルワーカーによる支援のバトンの軌跡」

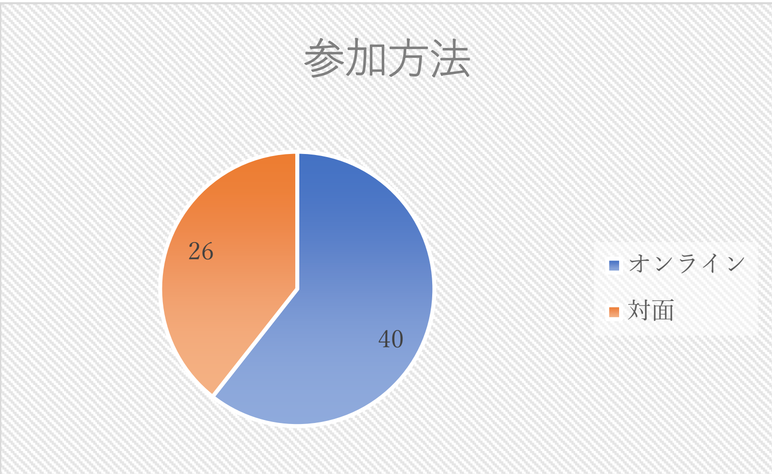
〜〜

石巻災害支援チーム 事務担当　金子　小夜子

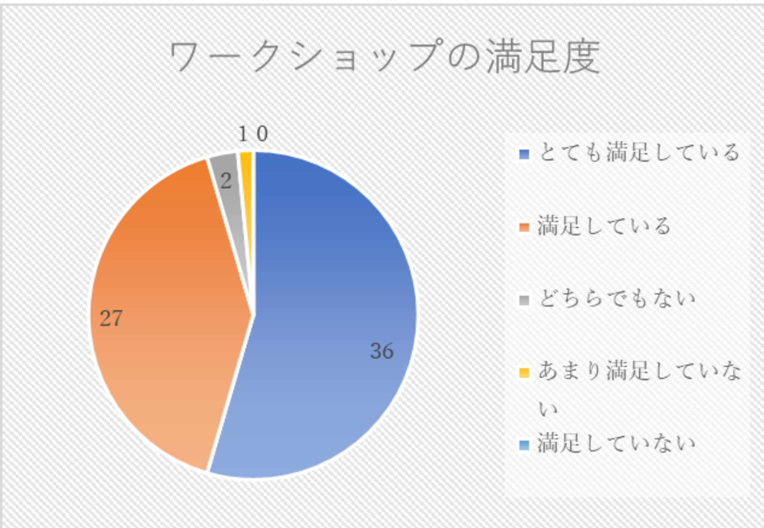
∞ ∞

参加者アンケート結果
合計数　：　66 名
内　訳　：　17 名（紙面）、49 名（フォームス）

1．参加方法を御回答ください。



2．本日のワークショップの満足度を御回答ください。



3. 命のかたり部の方の話を聞いて感じたことをご自由にお書きください。

・藤間さんのお話がとてもわかりやすかった。感情をおさえて静かに現場の状況を伝えるものだった。

・当時、高校生だった方の経験は初めて聞いた。お母様との関わりや進学した際の本音を聞いて、震災がもたらした心の被害は計り知れないと改めて感じた。

・かたり部自身の被災した状況があまりにも過酷であったにも関わらず、かたり部として活動していることはすばらしい。

・被災から 12 年が過ぎ様々な経験をしてきたことが、かたり部としての言葉となり、活動の源となっているとおもう。

・2011.3.11 に発生した大震災では、多くの人々が被災し、多くの命が失われたこと、を後世の人々に向けて語り継ぐことがいかに大切かを知った。

・自分自身の被災状況とは違っているが、このような活動をされていることに共感した。

・私自身も熊本地震の被災者の一人で、今回のお話しをとても興味深く聞いた。

・私の実家も東日本大震災の被災地で高校生だった当時を思い出し、胸が締め付けられる思いでお話を聞いた。当時を思い出すことは決して楽しいことではないが、そこから逃げずにこのような活動をされていることに感服した。

・私も震災当時仙台在住で被災したが、関東での就職が決まっており被災後 2 週間程度で仙台を離れた。千葉さんのおっしゃる罪悪感や無力感、すごくわかる気がした。12 年経って千葉さんのような語り部の方のお話を聞き、私の体験もいつか誰かに伝えるのもいいのかもしれないなと感じた。

・被災後 12 年が経過する中で、かたり部の方の時間経過に沿った思いの変化を追体験できたことは得難い体験となった。

・リアルに感じる事で身近なものとしてとらえる事ができた

・メモリアル公園の慰霊碑には犠牲となった人々のネームプレートがあり、刻まれた名前に触れることで被災者を偲んでいるようすがわかった。

・これからも頻発するだろう自然災害に向けて、一人一人の心の準備や地域での実践的な準備が必要と再認識した。

・災害発生に対し、日ごろから SW 自身も含めてできること、力になれることを考えておくことが必要。

・語り部の方の石巻を離れたいという思いが率直な思いだろうと感じた。3.11 の恐ろしかった記憶がうすれつつある中で、若い世代の方に語り続ける活動を大切にしていっていただきたい。

・その人にとっての３．１１を聞く体験・教訓を語り継ぐしかないが、それを話すのが辛い人がいる。話したいと思うがそれを表現できずにいる人がいる。それらの声をいかに感じるか、掴めるかは先程の柳田様の基調講演につながると思う。

4. 本日、参加した感想・今感じていること等、ご自由にお書きください。

・ニュースや報道で知るのとは違った支援の現場の状況を知ることができた。

・災害被害の記憶を風化させてないためにも、継続的に企画して頂きたい。
・ワークショップに参加し、改めて何が出来るのか考える機会となった。
・予測不能な災害に見舞われる日本では、過去の災害対策を参考に対策を立てる必要があると感じる。
・支援者の実体験を聞く機会は大切だと感じ、地域に根差す支援を行うためには住民とのかかわりや交流が大切。
・石巻支援活動が継続されていることが誇らしく、来年終了まで引き続き尽力ください。
・協会が石巻市に特化して支援を開始できたのはなぜだろうと素朴に疑問を感じたが、支援を継続してきたことには頭が下がる。
・語り部の講話だけでなく、今の石巻の状況を中継・オンタイムで見られたのは良かった
・被災一年後に石巻にボランティアで数日行き、貴重な経験をした。
・グループディスカッションはとてもいい機会だった。他県、他病院の現状、訪問診療の方々と意見交換し、現状も知れた。
・3.11 東日本大震災では、今までの自分の価値観が大きく変えられ「これが　答えだろう」と思っていた事がくつがえされるという事をいやというほど思い知らされた。何年たっても、これからも自分の中に 3.11 をどう向き合って受け入れていくかを考えていくと思う。
・ソーシャルワーカー

災害時の SW →
救急医療における SW →
（親和性があると思う）

・突然で
・心理的負荷が大きく
・その環境のなかでも決断を迫られる

4.　石巻だより１　（震災遺構「門脇小学校」を訪ねて）

石巻災害支援チーム 現地担当　　岩崎　隼生

私が石巻市に転居してから 1 年が経過しました。転居後に 1 番最初に被災場所を訪れたのが石巻市震災遺構門脇小学校でした。門脇小学校がある南浜・門脇地区では東日本大震災にて 500 人を越える方が犠牲となりました。門脇小学校は津波火災の痕跡を残す唯一の震災遺構であり、被災した校舎の一部が残っています。津波と津波火災による被害を後世に伝え、震災伝承施設として震災遺構・展示施設として公開されています。

私が実際に訪れて印象に残っているのが、津波火災で被害を受けたまま残されている教室、破れた窓、崩れ落ちた壁、壊れた椅子や机などで、当時の恐ろしい光景が伝わり、思っていた想像以上に被害が大きかったことを実感しました。来館して過去の災害を知り学ぶことができ、次に災害が起きた場合に備えていくことが重要だと気付かされました。

6 月 24 日、来館者が 5 万人を突破し、色々な方々が来館することで今回の震災の教訓や防災の取り組みなどを学び知ってもらうことが後世に引き継ぎ、次の災害の被害を少しでも減らすことに繋がると思いました

また先日、門脇小学校に訪問した際、8 月 4 日に石巻川開き祭り供養祭の時に、灯火をともした灯篭を浮かべて北上川に流す（流灯）そうなので、私も灯篭に言葉を書かせてもらいました。

↑石巻市震災遺構門脇小学校

↑流灯

5. 石巻だより２ （「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を訪ねて）

石巻災害支援チーム 現地担当 髙橋 としみ

私が津波伝承館を見学するのは初めてです。全国大会の打合せでお邪魔した「meet 門脇」の向いに震災で流された叔母の家の跡地があります。叔母の家の跡地には日和幼稚園の子供たちがバスごと流されてきた場所でもありました。父方のいとこ夫婦が、震災遺構門脇小学校のすぐ近くに住んでいました。二人ともなくなりました。水産加工会社のマルハニチロの工場があった隣には父の大叔父一家の住まいがあり、震災時安否確認をする為にこの祈念公園近くはずいぶん歩いた経験から、何年たっても記憶が生々しくあまり近づきたくない場所でもありました。

現在は昔の南浜の面影はなく、かすかに濡仏様が大切に残されていたり、西光寺さんも昔のたたずまいでした。伝承館は円形の建物で柔らかさを感じました。入口を入り、シアターを拝見しようと思ったら、すでに見学者で満員でした。次の待ち時間まで館内を回りました。説明も順序立ててしっかりした展示になっていると思いました。長い壁を利用した「つなぐ記憶」が映し出された映像は記憶を誘うもので、失われた街を偲び被災の大きさを心に刻みます。シアター館とは別に気軽に座って見られるのはとてもいいと思いました。また、震災後、芽が出たひまわりの種を配布していたので、私も蒔こうと思い種をいただいて帰りました。公園内には、次世代にメッセージをつなぐ活動として植林の区画があります。追悼・伝承・復興への強い意思を伝え続ける祈念公園として植樹した苗木を管理、育てています。いつか公園内が緑豊かになる日を祈ります。

【みやぎ東日本大震災津波伝承館】

展示のコンセプト～震災の記憶と教訓を伝え継ぐ～かけがえのない命を守るために～

【祈りの場】

みやぎ東日本大震災津波伝承館」のある石巻南浜津波復興祈念公園には様々な施設があり“祈りの場”もその一つです。追悼と伝承の場として「祈念公園」が水で重なる場でもあります。（福井記）

6. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 書籍販売】

『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅣ』

の販売を行っています！

発災から 2011 年９月３０日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011 年 10 月から 2012 年１２月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅡ』に、2013 年１月から 2014 年３月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。そして 2017 年５月、2014 年４月から 2016 年３月までの災害支援チーム、石巻市での復興公営住宅への入居支援・仮設住宅被災者自立生活支援・グループワーク支援・市民活動支援の記録を『バトンⅣ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせて頂きます。

※ご注文は注文用紙で承ります。（注文用紙はホームページからダウンロードできます）

お知らせ欄から注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/about/publish_index.php

注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/news/news_detail.php?@DB_ID@=1393

7. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回　第 13 巻（第 2 号）発行予定

令和 5 年 9 月

◇　編集後記

石巻災害支援チーム 現地担当　西田知佳子

6 月 17 日、18 日に有明で開催された第 71 回医療ソーシャルワーカーの大会は、1000 人以上の方が参加し、成功裏に終わった。石巻の福井責任者が記しているように、この大会で石巻から災害支援に関する報告をするのは今回が最後である。フィナーレにふさわしいワークショップだった。阪神・淡路大震災の記憶がある研究によるとわずか 1 年で多くの人々の記憶から消されていったそうであるが、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災は、当協会の会員の多くにとっておそらく忘れようにも忘れられない記憶となって、頭にも心にも深く残っていると思う。この 13 年石巻支援に関わった多くの MSW が中心となって「地域での災害時の具体的な避難と支援」を各地域で行い、今後予想される大きな災害に向け、日本協会としての備えを提案する。